

## 〔実践研究〕

# 大学生に対するスポーツ・インテグリティ教育の実践とその成果

東川 安雄<sup>1</sup>・新迫 志希<sup>2</sup>

## Implementation and results of sports integrity education for students

Yasuo HIGASHIKAWA, Shiki SHINSAKO

### Abstract

The purpose of this study was to find out how class practices that focused on multiple trouble cases related to sports integrity affected university students' attitudes toward sports integrity. The results of attitude measurements conducted before and after the class showed that empathic attitudes increased even more after the class. Although the class was implemented over a short period of time, it seems that we were able to achieve certain results in improving students' sports integrity attitude. However, it is unclear whether improved attitudes are maintained, and continued research is needed.

### Keywords:

sports integrity (スポーツ・インテグリティ), compliance (コンプライアンス), student (大学生)

## はじめに

近年、スポーツにおける暴力や暴言、ハラスメント等の不適切な行為が後を絶たない状況にある。日本スポーツ協会によると、スポーツにおける暴力行為等相談件数が2022年度には過去最多の373件となり、2023年度はそれを上回るペースであると報道されている（中国新聞，2023）。また2023年には、関東の2大学において運動部員が大麻取締法違反で逮捕され、同時に大学当局のガバナンスが問われるまでに事態は深刻化している。

このような状況をふまえ、文部科学省(2017)は、第2期スポーツ基本計画の「今後5年間に総合的

かつ計画的に取り組む施策」としてスポーツ・インテグリティ（スポーツが様々な脅威により欠けることなく、価値ある高潔な状態）の確保を掲げ、「我が国のスポーツ・インテグリティを高め、クリーンでフェアなスポーツ推進に一体的に取り組むことを通じて、スポーツの価値の一層の向上を目指す」こととし、この取り組みは第3期スポーツ基本計画においてさらに強化されている。一方、日本スポーツ振興センター（2023）は2014年から「スポーツ・インテグリティ・ユニット」を設置し、八百長・違法賭博、ガバナンス欠如、暴力、ドーピング等の様々な脅威から、スポーツ・インテグリティを守る取組を実施している。また、日本サッ

<sup>1</sup> 広島文化学園大学人間健康学部（Faculty of Human Health Science, Hiroshima Bunka Gakuen University）

<sup>2</sup> 広島文化学園大学大学院人間健康学研究科院生

（Graduate School of Human Health Science Master Program, Graduate Student, Hiroshima Bunka Gakuen University）

カー協会も2014年から選手やスタッフを対象とした研修を実施することを通してスポーツ・インテグリティの確保に努めている。このような状況をふまえ、日本スポーツ協会及び日本オリンピック委員会加盟の競技団体の役・職員に対する倫理・コンプライアンス違反の予防のための教育啓発活動等を実施している団体が約5割に上っている(スポーツ振興センター, 2020)。

しかし、勝田(2018)は、国内外のスポーツ組織や団体が取り組んでいるスポーツ・インテグリティ確保のための取り組みについて教育的役割の観点から分析し、「研修やシンポジウムを含む情報提供については、その実施頻度や継続性が十分とは言えない状況も確認された。また、教材開発、教育手法、カリキュラム構築を含む教育システムに関する取り組みについては、未構築、あるいは計画段階にとどまっていることも確認された。さらに、教育の対象に関する検討や、スポーツ・インテグリティ教育に関する学術的研究に関する取り組みも確認できなかった」と問題点をまとめるとともに、教育研究レベルの活動を含めた包括的な教育的アプローチの重要性を指摘している。このような勝田の指摘をふまえ、安永ら(2022)は、スポーツ・インテグリティに関する問題群を包括的に捉え、今後のスポーツ・インテグリティ教育における内容構築のための実践的示唆を得るために、選手や指導者のスポーツ・インテグリティ態度を測定し、その実態を明らかにしている。しかし、スポーツ・インテグリティについては研究の途に就いた段階であり、その研究対象もトップアスリートや指導者、さらには競技団体に係るものに留まっている現状にある。日本スポーツ協会が設置している暴力行為等相談窓口に寄せられた被害者の約6割が小中高生であるという実態をふまえると、トップアスリートやその関係者に留まらず、ジュニア層やその指導者、さらには学校における体育授業等でスポーツ・インテグリティ教育に取り組むことも重要であると思われる。

そこで本研究では、スポーツ・インテグリティ教育の内容や方法を検討する予備的研究として、

スポーツ・インテグリティに関わる複数のトラブル事例を中心とした授業実践が大学生のスポーツ・インテグリティ態度にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とするものである。

## 研究方法

### 1. 実践授業の概要

スポーツ・インテリジェンス教育として取り組んだ授業は、人間健康学部スポーツ健康福祉学科1年生の必修科目である「フレッシュマンセミナー(文化に生きる)」の1コマである。15回計画の4回目の授業で、「大学生活でのモラルと法律」というテーマで取り組んだ。受講学生数は108名であった。まず、文部科学省(2012, 2017)が策定したスポーツ基本計画の内容を解説するとともに、現在のスポーツ界における社会的問題(パワハラ、違法賭博、禁止薬物等)を取り上げて紹介し、スポーツ指導者及びアスリートはもちろん、大学生として必要なさまざまなコンプライアンス(法令順守)を学び直し、スポーツ・インテグリティ態度を身に付ける重要性を指摘した。

続いて、公益財団法人日本財団パラリンピックサポートセンターが発行している「マンガで学ぶスポーツコンプライアンス～アスリートが知っておくべき大切なこと～」(図1)を参考資料として配布し、その中から5つの事例を取り上げ、補助資料等を加えてコンプライアンスの重要性を具体的に解説した。今回取り上げた5つの事例は、表1のとおりである。

### 2. 測定内容

受講学生のスポーツ・インテグリティ態度の現状と授業後の変化を把握するために、授業前と授業後にスポーツ・インテグリティ態度を測定した。測定に当たっては、今回の授業で取り上げた5つの事例をふまえ、安永ら(2022)の研究を参考として場面設定法を用いた調査票(8項目)を作成した(表2)。回答については、トラブル場



図1 授業で使用した参考資料

表1 授業で取り上げたトラブル事例

事 例	関連法令
Case.01 コーチそれセクハラです！	民法709条, 刑法174条・176条・177条等 ストーカー規制法
Case.03 その薬, 本当に大丈夫？	WADA規程, JADA規程, 覚せい剤取締法等
Case.04 不正受給は詐欺です	民法709条, 刑法246条
Case.05 ちょっとした賭け事でも ...	刑法185条・186条
Case.10 その投稿, 不謹慎だぞ！	

表2 8項目のトラブル場面の内容

場 面
<b>セクハラ</b> 先輩A(男)は、後輩B(女)と仲が良い。先輩Aは試合前になると、後輩Bの頭や腰を「ガンバレ」とタッチしてくる。困った後輩Bが友人Cに相談したところ、友人Cは「先輩Aと後輩Bは仲がいいし、よくあることじゃん」と言った。
<b>パワハラ</b> 監督Aは、元メダリストで、競技内では有名人である。その監督Aが「異性との交際が競技力を低下させる」と言い、選手Bのスマホの中の異性の連絡先をすべて消すように強制した。困った選手Bが友人Cに相談したところ、友人Cは「あの監督Aが言うなら、仕方ないね」と言った。
<b>暴力</b> 先輩Aは、成績が落ち込む後輩Bを気にかけていた。そんな後輩Bがダラダラ練習している様子を見て、先輩Aはみんなの前で「ダラダラやってんじゃねえよ」と後輩Bのお尻を蹴った。困った後輩Bが友人Cに相談したところ、友人Cは「後輩Bのことを思って厳しくしてるからいいじゃん」と言った。
<b>ドーピング</b> 元メダリストの監督Aは「勝つこと以外に価値はない」といつも言っている。監督Aは選手Bに「ドーピングした海外選手ぐらいに、勝ちにどん欲になれ」と言った。選手Bの友人Cも「ドーピングしてでも勝つぐらいの覚悟が必要だね」と言った。
<b>賭博・八百長</b> 先輩Aは後輩Bを遊びに誘った。先輩Aは後輩Bに行き先を伝えず「一般の人では行けない面白いところに行くから、だまってついてこい」と言った。困った選手Bは友人Cに相談した。友人Cは「俺も一回行って、賭けに勝ってお金儲けたから行ってみたら」と言った。
<b>差別・偏見</b> 先輩Aと後輩Bが大会中に食事をしていた時に、外国人ばかりのスポーツ団体が騒いでいるのを見て、先輩Aは「ああいう外国人の団体は常識がないよね」と言った。友人Cも「日本人に比べて外国人って品がないよね」と言った。
<b>ネットトラブル</b> 先輩Aは試合中に熱くなるタイプだ。審判のジャッジが不満だと大声で抗議したり、ののしったりする。負けた試合後はよく「あの審判のせいで負けた」と言っている。友人Cは「あの審判の批判をSNSに書いて、拡散しようぜ」と言った。
<b>未成年飲酒</b> 試合後の打ち上げで、先輩Aは来年成人になる後輩Bに「少し早いけど、すぐに成人になるんだから」とお酒をすすめた。困った後輩Bは友人Cに相談したところ、友人Cは「みんな飲んでるから大丈夫だよ」と言った。

面で構成された8項目を読み、共感の程度を4段階（とても共感できる、すこし共感できる、あまり共感できない、まったく共感できない）で回答を得た。なお、分析上、「とても共感できる」と「すこし共感できる」を「共感的態度」、「あまり共感できない」と「まったく共感できない」を非共感的態度とする。

### 3. 統計処理

スポーツ・インテグリティ態度それぞれの評価は、構成する各項目への回答を4段階評価（とても共感できる→1点、少し共感できる→2点、あまり共感できない→3点、まったく共感できない→4点）に換算して行った。また、授業前と授業後における受講学生のスポーツ・インテグリティ態度の比較では、対応のあるt検定を行い検討した。すべての統計処理は統計解析ソフト（SPSS29.0）を用いて行い、統計的有意水準は5%未満に設定した。

表3 授業前後におけるスポーツ・インテグリティ態度の変化（平均値）

		Mean	SD	t値	p
セクハラ	授業前	2.38	0.89	-10.30	***
	授業後	3.31	0.83		
パワハラ	授業前	3.40	0.82	-2.87	***
	授業後	3.59	0.71		
暴力	授業前	3.06	0.82	-2.87	***
	授業後	3.43	0.79		
ドーピング	授業前	3.23	0.86	-5.13	***
	授業後	3.68	0.67		
賭博八百長	授業前	3.43	0.71	-4.91	***
	授業後	3.77	0.50		
差別偏見	授業前	2.96	0.80	-7.11	***
	授業後	3.44	0.80		
ネットトラブル	授業前	3.67	0.60	-1.83	*
	授業後	3.77	0.59		
未成年飲酒	授業前	3.23	0.83	-5.12	***
	授業後	3.63	0.64		

(\*:p<0.05, \*\*:p<0.01, \*\*\*:p<0.001)

## 結果と考察

### 1. 授業前

8項目からなるトラブル場面に対するスポーツ・インテグリティ態度について、授業前における測定結果を見てみる。表3のとおり、「パワハラ」(3.40±0.82)「暴力」(3.06±0.82)「ドーピング」(3.23±0.86)「賭博八百長」(3.43±0.71)「差別偏見」(2.96±0.80)「ネットトラブル」(3.67±0.60)「未成年飲酒」(3.23±0.83)についてはそれぞれ平均値が高く、非共感的態度が高い傾向にあった。一方、「セクハラ」については、表4のとおり、共感的態度と非共感的態度に分散する傾向がみられた。

### 2. 授業後

授業後におけるスポーツ・インテグリティ態度の測定結果について見てみると、「セクハラ」(3.31±0.83)「パワハラ」(3.59±0.71)「暴力」(3.43±

表4 授業前後におけるスポーツ・インテグリティ態度の変化（分散）

		とても共感できる	すこし共感できる	あまり共感できない	まったく共感できない
セクハラ	授業前	16.7%	39.8%	32.4%	11.1%
	授業後	2.8%	14.8%	31.5%	50.9%
パワハラ	授業前	1.9%	15.7%	23.1%	59.3%
	授業後	1.9%	7.4%	20.4%	70.4%
暴力	授業前	2.8%	22.2%	41.7%	33.3%
	授業後	1.9%	13.0%	25.9%	59.3%
ドーピング	授業前	4.6%	13.9%	35.2%	46.3%
	授業後	0.9%	8.3%	13.0%	77.8%
賭博八百長	授業前	1.9%	7.4%	37.0%	53.7%
	授業後	0.0%	3.7%	15.7%	80.6%
差別偏見	授業前	2.8%	25.0%	45.4%	26.9%
	授業後	1.9%	13.9%	23.1%	61.1%
ネットトラブル	授業前	0.9%	3.7%	23.1%	72.2%
	授業後	1.9%	2.8%	12.0%	83.3%
未成年飲酒	授業前	3.7%	13.9%	38.0%	44.4%
	授業後	0.0%	8.3%	20.4%	71.3%

0.79)「ドーピング」( $3.68 \pm 0.67$ )「賭博八百長」( $3.77 \pm 0.50$ )「差別偏見」( $3.44 \pm 0.80$ )「ネットトラブル」( $3.77 \pm 0.59$ )「未成年飲酒」( $3.63 \pm 0.64$ )の8項目ともそれぞれ平均値が高く、高い非共感的態度を示す結果となった。

### 3. 授業前と授業後の比較

スポーツ・インテグリティ態度の測定結果について、授業前と授業後で比較してみる。授業前の測定では共感的態度と非共感的態度に分散する傾向がみられた「セクハラ」については、授業後では $3.31 \pm 0.83$ と平均値が大きく上昇し、統計的にも有意に高い共感的態度を示す結果となった。これ以外の7項目については、授業前においてもある程度高い共感的態度を示していたが、授業後には統計的に有意な差が認められ、さらに高い平均値を示し、共感的態度がより高まったと思われる。さらに、今回の授業で取り上げた事例に係る項目について見てみると、「セクハラ」「ドーピング」「賭博・八百長」「ネットトラブル」のいずれの項目とも授業後に平均値が上昇していることが確認できた。

今回の授業では、90分1コマの授業の中で、複数のトラブル場面に係る事例を取り上げて説明をした。一つひとつの事例や内容について十分な時間を当てることができず、受講した学生の理解度については不明であるが、今回の測定結果を見る限り、受講学生のスポーツ・インテグリティ態度を一定程度高める成果を認めることができたと思われる。

### まとめ

本研究は、スポーツ・インテグリティに関わる複数のトラブル事例を中心とした授業実践が大学生のスポーツ・インテグリティ態度にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とするものであった。授業の前後に実施した態度測定の結果、授業後に共感的態度がより高まる結果が得

られた。短時間での授業実践ではあるが、学生のスポーツ・インテグリティ態度を向上させる一定の成果を認めることができたと思われる。しかし、向上した態度が維持できているかどうかについては不明であり、継続した縦断的な調査研究が必要であると思われる。

### 引用及び参考文献

- 中国新聞 (2023) スポーツ暴力相談最多に. 2023年1月30日朝刊.
- 藤井基貴・村越真・中村美智太郎・塩田真吾・満下健太・安永太地 (2021) 自律的思考を促すスポーツ・インテグリティ教育. 静岡学術出版.
- 勝田隆 (2018) スポーツ・インテグリティの探求. 大修館書店.
- Jリーグ (2023) インテグリティへの取り組み.  
<https://about.jleague.jp/corporate/fairplay/integrity/>  
 (2023年11月15日参照)
- 文部科学省 (2017) スポーツ基本計画 (第2次).
- 日本財団パラリンピックサポートセンター (2016) マンガで学ぶスポーツコンプライアンス～アスリートが知っておくべき大切なこと～
- 日本スポーツ振興センター (2020) スポーツ界のコンプライアンス強化事業における報告書.
- 日本スポーツ協会「スポーツインテグリティの保護・強化に関する業務」  
<https://www.jpnsport.go.jp/corp/qyoumu/tabid/516/default.aspx> (2023年11月15日参照)
- 安永太地・満下健太・上田大介・塩田真吾 (2022) トップアスリートを対象としたスポーツ・インテグリティ態度の実態と要因の分析. 日本教育工学会論文誌46(2): 275-288.
- 安永太地・塩田真吾 (2021) スポーツ・インテグリティ教育に関する国内研究動向の調査－スポーツ・インテグリティとその問題群の教育に着目して－. 静岡大学教育実践総合センター紀要31: 78-88.